

期待するもの

長野 隆

なせなら講演などという演台は氏の資質や思想からして、決して好ましい表現の舞台ではないはずだからである。いわゆる高名にあぐらをかいた中央文壇や学界の中で氏は異色といえぬほど、「孤独」という「己の思想をそのまま生活に生かしている文学者の一人である。己が思想的根柢の無い場には決して出ようとはせぬ人物なのである」とは、近刊予告の小林秀雄と併せて、氏にとつてはいささか珍しい単一の作家論がいずれも戦前戦後の作家たちに集中しているのを物語っており、なかでも太宰治には特別な関心が寄せられられていることがわさる。なせだろうか。ともかくこれに触れるためにも氏の批評の足跡を眺める必要がある。

「戦後文学論」(昭41)を皮

# 太宰治に何を視るか

切りに批評活動に入った龔庭は、そこで、いわゆる戦後文学に対する在来の安易な歴史主義的批評基軸をしりぞけ、作家個人の内面から、いわばその存在体験に照らして批評するといった独自の立場を表明する。自我の美存の深みに立つその真摯（しんし）な批評方法は、バシニールをはじめとする現象学等に依拠した入新批評／そのものの登場

を生む。それが大正教養主義への検討を伴って近代中期の文学思想に焦点を絞るの必き定たろう。「昭和文学私論」〔昭51〕はその一例である。

結局、近著の「経験と超越」〔昭60〕等を見ても分かるように、龔庭の関心は「近代」という魔物の正体であり、それをいや応なくいくぐらねばならなかった日本的心性の在りかである。いわば故郷日

孝男氏 庭鑑  
 いう名の「近代」に馳（は）  
 せた知識人たちの敗残と自己  
 超克のドラマである。そのよ  
 うな癡庭が太宰治に何を視  
 （み）るか。この雪の津軽で  
 何を語るか。ひそかな憶測を  
 抱きつつ楽しみにしている。  
 （弘前大学講師）

その二つの結果が「反歴史主義の文学」(昭47)である。氏は「この方法を確立させるとともに戦後文学の超克を企てようとする。この存在論的方法に裏打ちされた「戦後」的関心思想に対する懷疑的洞察はそのまゝ明治以降の「近代」へと視野を拡充させて「近代の解体」(昭51)等の著書

× ×

櫻庭孝男講演「太宰治と『健甕』」は、十四日午後二時から弘大人文学部三〇五教室で行われる。一般五百円、学生三百円。紀伊國屋書店、今泉本店、弘大生協書齋部でチケットを販売している。問い合わせは、野村方、電011-7237779。

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです